

地元の医療職・介護職・福祉職と救急救命士、中学校・高校教諭がいっしょに伝え・育てる中学生、高校生への在宅介護の心と脳卒中、救急処置、くすり、健康教育。

齊藤 正樹 氏

札幌医科大学アドミッションセンター 講師（兼）
神経内科 脳神経外科



1.背景

医療と介護の質を高め、維持していくためには、ハードやソフトの整備、連携の促進もさることながら、まず、基本になる人の育成が重要です。そして、誰から言われるまでもなく、そこに携わる個人と組織自らが研鑽し続けることが望ましいと思われまます。しかし、殊に、介護福祉の現場では、働きながら新しいことを学び続けることは決して容易なことではなく、学ぶことが目に見える形で評価されないとき、その尊い心が潰えそうになったとき、その心を支えられるのは、本人と家族、利用者だけでなく、介護・福祉職を理解、評価できる「地域とそこにいる人々」であると考えます。

私たちは2007年より地域の介護福祉スタッフの知識とスキルを高めるために研修会を開始しました。介護福祉スタッフが学ぶ機会とその成果を地域の子供たちに還元する機会、地域の介護・医療・行政・教育にかかわる人々が一緒に学び、理解する場を作ろうと考え、2011年度からは研修を受けた介護福祉従事者が先生役となって救急隊員、教諭、医療従事者とともに市内4つすべての中学校、高校での普通救命講習に参加する仕組みを作りました。薬物濫用の防止や薬の正しい理解を深める場も合わせて設けました。現在、介護福祉スタッフへの教育内容の底上げやテキストの均てん化が新たな課題となっています。

2.目的

在宅看護と介護・福祉に携わるスタッフへの教育により地域の医療と介護の向上を目指す。

3.計画

地域の介護・福祉スタッフのテキストを作成する。地域の介護・福祉職、医療・看護職、薬剤師、救急隊、教諭が協力して地域発信型の教材(下敷き、シナリオ、テキスト)を作成する。これらは授業での教材や家庭での振り返りに使えるよう仕上げる。講習は4校で行う(中学校2校、高校2校)。普通救命講習に加えるのは、脳卒中救急対応、災害教育、基本的な生活習慣、禁煙、薬の正しい使い方などから学校側の意向に沿って決定する。講習の前後で参加生徒にアンケートを行い知識の定着度や介護職、福祉職への理解を明らかにする。また参加スタッフにも調査を行う。

4.期待される成果

この取り組みを通して、地域の医療・介護と教育、行政の相互理解の方法と課題が提示される。施設やシステムの整備、情報共有とは異なる、「地域の大人から子供までの教育によって医療と介護を高めていこうとする取り組み」を、地域にとどまらず全国に発信することで、この貴重な助成の理念に応えたいと考えています。